「狂言狂人」

―二稿―

2025/2/23

脚本 太郎

〈人物表〉

外山　達也　（35）　会社員
外山　志保　（34）　主婦。達也の妻
外山　千枝　（5）　達也と志保の娘

〈ログライン〉

不注意による事故で娘を死なせてしまった達也は、娘の喪失で狂ったと思われていた妻の志保の狂気に流されるような日々を送っていたが、それが狂言であることが明かされ心中を強要されると、最後に身を犠牲にして志保を守る。

〈ねらい〉

・二面性を書く。

1.

キャンプ場（昼）

轟音と外山 志保（34）の悲鳴が響き渡る。

車の後輪が外山 千枝（5）の身体に乗り上げ、血溜まりができている。車のリアバンパーは木にめり込んでいる。

運転席と助手席にはエアバックが展開している。外山 達也（35）が運転席で気を失っている。

志保、泣きながら千枝のすぐそばにうずくまっている。

志保　「千枝っ、千枝っ」

2.

外山家・寝室（朝）

達也、ベッドで勢いよく目を覚ます。

汗をびっしょりとかいており、息は荒い。

達也は隣を見る。

ダブルサイズのベッドだが、隣には誰もいない。

3.

外山家・リビング（朝）

達也、憂鬱そうな顔で部屋に入る。

達也　「おはよう」

食卓には朝食が並んでいる。

向かって左から志保と、女の子の人形が座っている。

志保　「遅いわよ。娘の誕生日に寝坊なんて。千枝も待ちくたびれたってよ」

志保、傍らの人形を向く。

志保　「ねぇ？　千枝」

達也、苦し気な表情で、できるだけ人形の方を見ないようにしている。

達也　「悪かったよ」

志保　「まったくもう、せっかく今日は家族三人でキャンプに行く約束だっていうのに」

達也　「え？」

達也、呆けたような顔。

志保、張り付いたような笑顔を維持している。

志保　「そうだったでしょ？」

達也の顔が見る見る青くなる。

4.　車内（昼）

車は森林の間の舗装された道路を走っている。
運転しているのは志保で、張り付いたような笑顔。
その膝の上には女の子の人形が載っている。
助手席には達也。苦しげな表情で下を見ている。
沈黙。
ふいに志保が窓の外を指さす。

志保　「見て、あなた。あれ鹿じゃない？」

達也、ビクリと震える。

達也　「え、えと……」

達也が慌てて辺りを見回す。

志保　「もうどっか行っちゃったわよ。まったく、ボーッとしてるんだから」

志保、陽気に笑う。
達也もぎこちなく笑う。
車は気持ちスピードを上げていく。

×　×　×

達也、不安げにそわそわしている。

達也　「な、なあ……キャンプ場、もう通り過ぎたんじゃないか？」

志保　「あら、どうして？」

達也　「だって、前来た時、こんなに奥まで入ってなかっただろ」

志保　「あなた、妙なこと言うのね」

志保がゆっくりと達也の方を見る。無表情。

志保　「まるで前にも来たことがあるかのような言い方」

達也、ギョッとする。

志保　「わたしたち、ここに来たのは初めて。そうよね？」

達也　「あ、あぁ。……そうだった、そうだったな」

志保、ジッと達也の顔を見続ける。

達也　「なあ、志保……前を見て運転しないと」

志保　「何？　わたしの運転が不安？」
　志保、苛ついた様子で前を見る。
志保　「娘が真後ろにいるのにアクセルとブレーキ踏み間違えるような馬鹿よりよっぽどマシだと思うけど」
　達也の息が荒くなる。
　視線を泳がせながら、不安そうに胸を押さえる。
達也　「志保……？」
志保　「ねえ、あなた」
　笑顔に戻った志保が達也を見ている。
　志保が膝の上の人形を素早く達也の膝に乗せる。
　達也が咄嗟に人形が倒れないように押さえる。
志保　「千枝ちゃん、パパが良いみたい」
達也　「あ、あぁ……」
　達也、恐る恐ると言った手つきで人形の頭を撫でる。
志保　「キャンプ、楽しみね」
　達也、引き攣った笑顔。身体が震えている。
達也　「そうだな。パパも、凄く楽しみだよ」
　志保の表情が完全に静止。
　同時に勢いよくブレーキを踏み、車が急停車。
　志保の表情は怒気に染まっている。
志保　「もういいわよ！　こんな茶番飽き飽きだわ！」
　志保、人形を右手で掴むとその手でサイドウィンドウを勢いよく殴りつける。
　ガラスが割れ、破片と共に人形が路上に落ちる。
　志保の右手は切れ、血が滴っている。
　達也が悲鳴を上げる。
志保　「こんなボロ人形が千枝なわけないじゃないのよ、目腐ってんじゃないの？」
　志保がアクセルを踏み切り、車が急発進。
　車の後輪が人形を踏み越える。
　見る見る車のスピードが上がっていく。
　志保、達也を睨みつつ怒鳴りつける。
志保　「何が『楽しみ』よ。ふざけてんの？　今日が何の日か分かってんの？　千枝の誕生日である以上に、千枝の命

日じゃないのよ」
志保、膝で思いきり運転席のグローブボックスを蹴り上げる。
達也、再び悲鳴をあげる。
志保、大きく溜息をつく。
志保「一年、経っちゃったわよ」
志保、僅かに落ち着いて前を向く。
車のスピードが徐々に落ちていく。
志保「わたしこれでも寛大な方だと思わない？　一年も待ってあげたのよ？」
達也「し、志保……」
志保「でもあなたはずっとわたしの馬鹿みたいな演技に流されるだけだった。寄り添ってくれなかったし、自分から何もしてくれなかった」
達也、腰が抜けた様子で、どうにか言葉を紡ぐ。
達也「本当に、申し訳ない」
志保「言うことはそれだけ？　自分がしたことに向き合ってすらこなかった人間が」
達也「本当にすまない。本気で、申し訳ないとは……思ってるんだ。思ってるんだけど、でも……」
達也の目に涙が滲む。
達也「でも……」
達也が悔しそうに拳を握り締めている。
志保「呆れた。どこまで腰抜けなの？」
志保がアクセルを再び踏み込む。
車のスピードがぐんぐん上がっていく。
志保、ポツリと、
志保「この先さ、崖なの」
達也「え？」
志保「妥当だと思わない？　わたしたちもう精神的にはとっくに終わってるんだし、ここらでキッチリ幕引こうよ」
達也、慌てた様子で志保の肩に手を置く。
達也「頼む……そんなことやめてくれ」
志保「何？　命乞いのつもり？」

志保、嘲るように笑う。
やがて悲しそうな笑顔になり、

志保　「どうせならさ、あのとき千枝じゃなくてわたしを轢き殺してくれた方がまだ幸せだった」

達也、絶望の表情で唇を噛みしめる。
崖の淵のガードレールが眼前に迫る。
達也、目を瞑ってゆっくりとシートベルトを外す。

5. 道路（昼）

崖の前の道路。
志保たちが乗った車がガードレールを突き破る。
達也が志保に覆いかぶさる。
志保、驚愕の表情。
直後、車が落下していく。
轟音。

6. 車内（昼）

ひっくり返った車の中。
エアバックが展開し、ガラスは大半割れている。
志保に覆いかぶさった達也は血まみれで、頭や首、背中にいくつものガラス片が刺さっている。ピクリとも動かない。
志保も血まみれだが、ガラス片はほとんど刺さっていない。意識はある。
志保の手が達也を揺する。
反応はない。
少し間を置いて、もう一度志保の手が達也を揺する。
反応はない。
仰向けのまま呆然とした状態で、志保の目からゆっくり涙が伝う。

志保　「遅いよ」

終